2023年4月30日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№18)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　大日南苗香姉

開 会 招 詞　詩編105編1－5節

＊ 賛 美 歌　4:1（ソングシート）

1. あめつちにまさる　神の御名を　ほむるに足るべき　こころもがな。アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　4：2（ソングシート）

3. 生くるも死ぬるも ただ主をおもう ゆるがぬこころを あたえたまえ。アーメン

公 同 の 祈 祷　16　復活節 第三主日 主の昇天

命の主なる神さま、復活の主イエスは、わたしたちに新しい命の住まいを備えるために、天に昇られたことを覚え、心から救いの御業をほめたたえます。主の昇天によって、私たちの救いの道が

完成したことを、感謝しつつ御名を賛美します。

贖い主イエス・キリストこそ、まことに、あなたに至る道であり、真理であり、命であると告白します。主は今も生きておられ、世の終りまで、いつも私たちと共にいてくださることを感謝します。アーメン。(ヨハネ14、マタイ28)

献　　金　（黒）教会活動・（赤）大会執事活動　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

子ども礼拝

聖　書　朗　読　　エレミヤ２3章３－８節（旧約聖書1219頁）

ヨハネ14章1－12節（新約聖書196頁）

説　教・祈　祷　「待っていた導き手」杉山昌樹牧師

＊賛　美　歌　５０:１，２（ソングシート）

1. 牧主わが主よ、まよう我らを 若草の野べに　導きたまえ。
われらを守りて　養いたまえ、我らは主のもの、主に贖わる。

2. 良き友となりて　常にみちびき、まよわば尋ねて　ひき返りませ。
われらの祈りを　受入れたまえ、我らは主のもの、ただ主に頼る。**アーメン**

＊主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊頌　　栄　　６８

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。アーメン

＊祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会門脇献一長老・受付那珂百合子長老（次週：門脇陽子・門脇献一長老）

本日　受付　１階：佐藤紀子・古澤迪子執事　２階：森永美保執事　／ZOOMホスト・録音：番場験也

次週　受付　１階：星野房子執事　２階：大日南信也執事 ／ZOOMホスト・録音：大日南信也

ヨハネ10：1－10　「待っていた導き手」

導く者

今日の説教題では「導き手」という言葉を使いました。私たちの人生を導いていく存在がもう現れている、こう言いたかったからです。もちろん、それはイエス様です。そのイエス様はこのところでは、羊飼いとして描かれています。私たちの人生においては、様々なことがあって、良い時もありますけれど、何でこうなるのか、と思わずにはいられない出来事がやってくることもあります。しかし、良い時も悪い時も、私たちの進むべき道は、実はいつでもはっきりとしている、たとえどんな状況になっても進むべきところへとイエス様が連れて行ってくれる、今日は、その確かさを一緒に聖書から読み取っていきたいのです。

たとえということ

今日の聖書は6節で「イエスはこのたとえを」という言葉がありますように、イエス様が語られたたとえです。たとえ話というのは、そもそも、物事をわかりやすく伝えるためにあります。ところが、6節の続きを見ますと「この譬えをファリサイ派の人たちに話されたが、彼らはその話が何のことなのか分からなかった」と書いてあります。わかりやすくするためのはずがそうはなっていないのです。そして確かに、このところは、少し複雑な感じがしないでもないのです。例えば、イエス様はご自分で、わたしは門であり、羊飼いだ、と言われていますからその点はともかくとして、ここでは二度も盗人や強盗が登場しています。これは一応、政治的な指導者たちのことのようですけれどもあまりはっきりとしません。さらに、突然門番が登場しますけれども、これもまた、だれのことだ、と言われると困ってしまいます。そして、5節では、今度は、羊飼いのライバルとして、「他の者」が登場しますけれども、これもまた、一体誰を指しているのかはっきりしません。こういってしまいますと、どうにもすっきりしない感じですけれども、おそらく、このところでは、あまり単純に、この盗人は、昔のイスラエルの指導者、この門番は神様、と言ったように、これはこの譬え、というような当てはめ方をしないほうがよいかもしれないのです。そしてむしろ、このところを読む場合にその前提となっていることがとても大切かもしれないのです。

イエスとの関係こそ

それで、この譬えを読む場合に決定的なことは、実はその前の9章ですでに始まっています。そもそも、イエス様がこの譬えを語ることになったのは、ユダヤ人あるいはファリサイ派として登場した人たちが、イエス様の行った癒しを認めたくない、それを正しいと認めたくない、このような思いに凝り固まっていたからでした。それを象徴するのが9章の「あのものはどこから来たのか知らない」（28節）という言葉です。自分たちは、神様のことは良く知っている、分かっている、でも、あのイエスと言う男のことなど知らない、こういうのです。このように、イエス様について、一切認めたくない、という前提を作ってしまっているのが、このファリサイ派の特徴です。それゆえ、この時、ファリサイ派の人々が、何のことか分からなかった、というのはある意味では仕方がないことです。けれども、この事実は、もう一つの可能性を示しています。それは、この一見、色々と話があちこちに行っているように見えるたとえ話の一つ一つは、イエス様が丁寧に語ってくださっている言葉なのであり、当然と言えば、当然なのですが、しっかりと読み取っていく気があるなら、とても恵み深いものであるはずだ、という見通しです。イエス様に聞きたい、イエス様の言葉をわかりたい、このような思いをもって取り組むのなら、わたしたちは、この言葉から、豊かな命を受けるのです。実は、今日の10節には、はっきりとそのことが宣言されています。「羊が命を受けるため、それも豊かに受けるため」というところです。それで私たちは、この譬えの意味を丁寧に考えながらこのところを読み進めたいのです。

問題の中心としての「囲い」

その場合に、このところでまず鍵になる言葉があります。それは「羊の囲い」という言葉です。これは実は、16節にも出てきまして、そこでは、別の羊も存在することになっていますが、いずれにしても、羊は囲いに入っている、このようなものとして描かれています。この囲いとは、神様の守り、ある

いは神様のものとなっている、印という意味に理解したいのです。その場合に、この囲いを超えてこようとする、盗人、強盗があるとも書いてあります。イエス様から引き離そうとする力が働いている、というのです。しかし、そこには確かに囲いがあって、わたしたちは実はその守りの中にある、というイメージです。そして、これは観念的なことではありません。頭のことではないのです。むしろとても実際的、現実的なことです。私たち自身が今、置かれた状況をどう見るのかです。私たちが日々の生活の場で、学校でも、職場でも、家でも、それこそ町のどこかでもお店でもいいのですが、そこであなたは、どこにいるのですか、という問題です。神様の守りの中にあるのですか、囲いの中にあるのですか、ないのですか、ということです。このところでイエス様は、あなたたちは囲いの中にいるのだ、このようにはっきりと宣言しておられるのです。

声を聞き分けるということ

さらに、そのような囲いから出る時にも、なお、守りは続く、というのが3，4節で語られていることです。ここでは羊飼いと羊のとても強い絆が描かれています。この3－5節を読みますと「声」が問題になっています。羊は声を知るものとして描かれています。一方羊飼いは、名前を呼んで、連れ出すものとなっています。当然ですが、この羊飼いは、イエス様です。その関連で11節でイエス様は、ご自身についてはっきりと「私は良い羊飼いである」と言っておられます。そのような私たちとイエス様の関係をみごとに描いたのが、４節の言葉です。もう一度読んでみます。「自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのでついていく」。恐らく、教会のあるべき姿は、これです。イエス様が私たちの名前を呼んでくださるのです。そして私たちは誰でも、このイエス様についていくのです。いうまでもありませんが、牧師についていくのでも、教会についていくのでもありません。イエス様についていくのです。イエス様が先頭に立って進んで、私たちはその後をとことことついていく、これこそが全く正しい状態です。そして、そのような関係を成り立たせるのは、イエス様の声、その呼びかけだ、とこのところに書いてあります。それは私たちにとっては、聖書の言葉です。聖書を通して、説教を通して語り掛けてくるイエス様の声だけに聴いていく、ということです。それを聞き分ける耳を私たちは与えられているというのです。「羊はその声を聞き分ける」というのはそのことです。

門としてのイエスーはっきり

それから、ここではもう一つ大切なことが語られています。それは7節の門の話です。ここでは、イエス様が二つの強い言葉を繰り出しています。一つは、「はっきり言っておく」という言葉です。新改訳聖書では「まことにまことにあなた方に告げる」と訳していますが、これはイエス様が決定的なことを言う時の決まり文句です。私たちにとりましては、ムム、イエス様本気だ、と襟を正して聴くところです。それで例えばヨハネ5章にはこんな言葉があります。「はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」（5：25）。この場合に死んだ者というのは神様の前で失われていた者のことです。イエス様に倣ってはっきりと言いますと私たちです。私たちは神様のことが分からなかったものですけれども、今は、神様の声を聞くものにされています。この私たちが、神の子、すなわちイエス様の声を聞く、それも今聞くのです。そしてその声を聞いた者は生きる、と続きます。その場合の「生きる」とは、ただ生物的に生きている、のではありません。もっと生き生きと生きる、という意味のはずです。肉体の命があっても死んだような生き方があります。一方で、体が弱くて死にそうでも、なお生き生きと生きる生き方がありえます。イエス様に聞くということはこの意味で、生き生きとした生き方だというのです。

私は門である

それからくどくなりますけれども、ここでもう一つ大切なのは、「わたしは、である」という言葉です。これも、イエス様が特に大切なことを言う時に語られる言葉遣いです。例えば「わたしは命のパンである。」（6：48）、「わたしは世の光である。」（8：12）、「わたしは復活であり、命である」（11：25）、「わたしは道であり、真理であり、命である」（14：6）とまだありますが、このよ

うに、イエス様を通して、わたしたちが神様とつながる、命とつながる、そのことをはっきりと宣言される個所で、イエス様は、この「わたしは、である」という言い方をされます。それはこの所でも全く同じです。「私は門である」というのは、この場合、わたしたちが神様とつながって生き生きと生きていく、そのような生き方へとつながっている門とはイエス様である、という意味です。イエス様だけが、この命に至る生き方の門なのです。9節にあります「わたしは門である。わたしを通ってはいるものは救われる」とはまったく、イエス様を通して、神様の守りの囲いに入っている、という意味です。

命を受けるため出入りする

さらに言いますと、この場合の「救われる」というのは、誰が救われているか、救われていないか、というような神学議論ではありません。そうではなく、神様とつながった、命溢れる生き方こそが、救われたという言葉の意味です。そのことは、9節の続きの言葉ではっきりとします。「その人は門を出入りして牧草を見つける」。当然ですが、この場合の牧草もまた「たとえ」です。私たちは、羊の命を養う牧草のように、わたしたちの心と体の命を養うものを探し出すために日々出かけていきます。この世の中に出かけていきます。そこで、わたしたちが、イエス様という門から出発するなら、私たちの全身を生き生きとさせる良いものを、必ず見つけ出すことができると、いうのです。。

命を豊かに－待っていた導き手

このようにしてイエス様は、ただただ、わたしたちがみな、この命を豊かに受けるために来た、というのが10節の結論です。それは有り余るほどの豊かさです。そんなことない、私の命は、私の満足は、わたしの願望は、満たされてない、全く不十分だ、と普段私たちは思っているかもしれません。しかし、そのような私たちのそれぞれの所に、このイエス様は、すでに来ておられるというのが今日の結論です。私たちの日常の中にです。私たちが、常々、ああ、いまここで、助けがあったらいいのに、と思っているかもしれない、そのような私たちのそれぞれの生活の中に、私たちが待っていた導き手としてのイエス様、私たちの羊飼いであるイエス様が、すでに来ておられるのです。

祈祷

主イエス・キリストの父なる神様。私たちには、主イエスという門があります。私たちは、いつでもそこから出かけていくことができます故に感謝いたします。どうぞ、私たちのこの週の歩みが、主イエスによって導かれ、また、主イエスに従って歩むものとなり、それぞれに命の糧が豊かに与えられますようお願いします。主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。